

第3回将棋電王戦を振り返って

YSS 戦を振り返る

1

豊島将之（日本将棋連盟）

応
般

今回の電王戦はソフトの事前貸し出しありというルールだった。本番の対局の4か月前からYSSを貸し出してもらい練習した。

練習対局は途中で中断したものを含め数百局行った。序盤は有利になることが多かったが中終盤で逆転負けすることが多かった。ソフトは終盤が強いという定評があるが、私には中盤が特に強いように感じられた。

将棋の解説に移る。ソフトの序盤は定跡が大量に入っておりそれをランダムに選ぶ。私が先手で初手7六歩と指した場合、後手は、3四歩と8四歩の2通りがあり、2：1の割合で3四歩と応じることが多いことが分かっていた。その後、15手目の3四飛までいくつもの分岐点があったが実戦は横歩取りの局面に落ち着いた（図-1）。

その後の21手目の8七歩まではプロ棋士間でもよく指されている進行である。22手目の6二玉は練習で初めて指されたときは驚いたが、練習で十数局指していたため本番では特に驚きはなかった（図-2）。

局後に、この後手の6二玉が悪手でYSSが不利になったのではないかという意見もあったが、私は悪手とは言い切れないと思うし、この対局の後にプロ棋士同士の公式戦でもこの6二玉が現れており、実際には難しい局面だと思う。

6二玉に対し穏やかに駒組みする手もあるが、激しい戦いにしてソフトの得意な中盤戦を短くしたかったため、3三角成から一気に終盤に入る積極的な手を選ぶことにした。

26手目の3一銀には意表をつかれた（図-3）。この手でここまで十数局あったYSSとの練習対局の前例が一気に1局にまで減った。ここでは、代えて4四角が多かった。

32手目の4四角では4五桂、1一竜、2四飛と変化される方が嫌だった（図-4）。ここで初めて少し先手に形勢が傾いたと感じた。

さらに進んで40手目の8八歩の局面でも1九竜とされた方が嫌だった（図-5）。こう指されていたら、少し先手が有利なものの勝負としてはまだまだ難しかったのではないかなと思う。



【第15手▲3四飛まで】

図-1 15手目3四飛まで



【第22手△6二玉まで】

図-2 22手目6二玉まで



【第26手△3一銀まで】



【変化図 第26手△4四角まで】

図-3 26手目、実戦と変化図

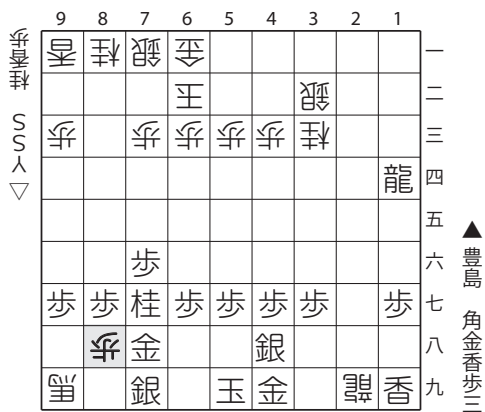


【第32手△4四角まで】

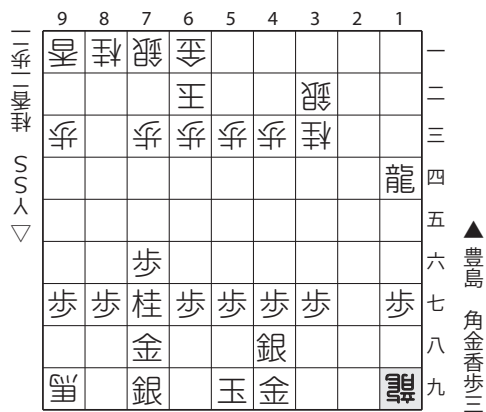


【変化図 第34手△2四飛まで】

図-4 32手目、実戦と変化図



【第40手△8八歩まで】



【変化図 第40手△1九龍まで】

図-5 40手目、実戦と変化図

局後開発者の山下宏さんに聞いたところ YSS は 41 手目の 3 九金から竜を捕まえにいく手順を軽視していたとのことだった。

8 八歩の局面 (図-5) と 2 九同金 (図-6) と進んだ局面を比較してみよう。先手から見ると、飛車 (竜) を得て、4 二飛と打つ狙いを得たのに対して、

後手から見ると、金と香を得て、自分の手番を得たというメリットがある。ここまでの双方のメリットはほぼイーブンであると言える。

しかし、もう 1 つ、4 九にあった金が 2 九に移動している。これをどう見るかということであるが、この評価の違いが私と YSS の違いであった。この

第3回将棋電王戦を振り返って



【第45手▲2九同金まで】

図-6 45手目、後手の竜を捕まえた局面



【第47手▲1五龍まで】

図-7 47手目の局面

局面では、いずれ後手は8九歩成のように左辺から攻めてくることが目に見えているので、プロの目から見るとこの金の移動は玉の逃げ道を広げて先手にプラスに働いていると見る。一方、YSSは金が玉から離れたことや、2九金という形がプロの実戦でほとんど現れないということから悪形であると判断してしまったのだ。その結果、この手順の軽視につながった。図-6では、私は指しやすさを感じていた。

それ以降の指し手で苦心したところとしては47手目の1五竜の局面だ（図-7）。YSSは粘り強いという印象を持っていたので、しっかりと読んで、怖くとも変化をできるだけ与えない指し手を選んだ。

今回YSSと指すにあたって注意したところは、以下の3点である。

- 1) 予測にない手がくることが多いので人間同士の対局に比べ、中終盤に持ち時間をできるだけたくさん残しておく
- 2) 中盤戦が強いという印象だったので、一気に終盤に持ち込めるようなら、そういう将棋にする
- 3) 有利になったら強く踏み込んだ指し手を選び、粘りを与えない

今回の電王戦のルールでは、事前にソフトの貸し出しありというルールであったが、そのメリットとしては、6二玉（図-2）という手に驚くことなく3三角成から2一角（図-3）という危険な手順に踏み込んだことや、上述したような対局前の心構えができたことなどが挙げられるだろう。一部に、必勝

の手順を編み出すことができるのではないかという話もあったが、練習対局を行ってみて、それは不可能だと感じた。

電王戦に出場してYSSと対戦することになって、事前に練習対局をしたという経験は、私自身の将棋にとって、とてもいい影響を及ぼしたと感じている。強い相手と指すことによって勉強になったというのは言うまでもないが、将棋の可能性についてもYSSから教えられた気がする。

私は強くになるに従って、将棋の自由度は狭くなるように感じていたが、YSS等のコンピュータソフトは棋士から見るとかなり自由に序盤を指しているように見えた。それでたとえ多少不利になったり、まとめづらい形になったとしても、中盤の圧倒的な読みの量でなんとか勝負にしてしまう。

YSSと指したことで、中終盤の大切さを再認識させられることになった。また中終盤が強くなった先には、序盤を自由に自分の好きなよう指せるようになるのではないかと感じることもできた。これが今回の対戦の最大の収穫であったと思っている。

（2014年6月2日受付）

豊島将之 | qqf7ws9k@friend.ocn.ne.jp

日本将棋連盟プロ棋士七段。1990年愛知県出身。2007年四段、2009年五段、2010年六段、2012年七段昇段。2008年勝率一位賞、最多勝利賞。2010年度新人賞。2011年度、最多勝利賞など。